

状態及び状態変化動詞の意味論*

井上 和子

1. はじめに

本稿は、概念構造意味論における、英語の状態動詞及び移動・状態変化動詞の基本的且つ包括的な枠組みを明らかにすることを意図している。具体的には次の二点を目的にしている。まず第一点は、英語の基本的な状態、移動及び状態変化動詞を取り上げ、それらがどのような関数を用いて記述できるかを、示すことである。第二点は、基本的な状態動詞の一つである *have* とそれと関連する動詞を取り上げ、本稿で問題としている動詞の意味概念構造表示がどのように項構造、統語構造に具現化されるかを探ることである。

本論は2節より成り立っている。第一の目的に関しては、第2節で扱う。まず2.1節では、Jackendoff (1990) で提案されている分析の対案として、基本的な状態動詞である存在の *be* と移動動詞の典型である *go* の意味的振る舞いの検討から、両者がどのような関数構造で表わされるべきかに関して新たな提案を行なう。次に、2.2節から2.4節では、「指向性」を表わす状態動詞、「広がり」を表わす移動動詞、継続状態を表わす *remain*, *stay* などの動詞が、2.1節で引き出された一般化とどのような関係をもつかを論じる。2.5節では、さらに、形容詞を補語にとる状態変化動詞を取り上げ、2.1節での一般化が成立するかどうかを、考察する。第二の目的は、3節で扱う。3.1-3.3節では、存在を表わす *be* と所有の *have* との関係から、関数 BE から関数 HAVE を形成する語彙規則を提案する。3.4節では、関数 HAVE をもつ概念構造が、項構造、統語構造にどのように投射され

- c. [EVENT] → { [Event GO ([THING], [PATH])] }
 { [Event INCH ([STATE])] }
 { [Event STAY ([THING], [PLACE])] }
- d. [STATE] → { [State BE ([THING], [PLACE])] }
 { [State EXT ([THING], [PATH])] }
 { [State ORIENT ([THING], [PATH])] }

Jackendoff (1983) においては、Event の関数として GO のみを立てているが、(2) においては GO と類似した INCH (OATIVE) という関数を別に立てている。例えば、(3a)、(4a) のような文は、それぞれこの二つの関数を用いて (3a)、(4b) のように表示されている：

- (3) a. The train traveled to Chicago.
 b. [Event GO ([Thing TRAIN], [Path TO ([Place CHICAGO]]))]
- (4) a. Water filled the tank.
 b. [Event INCH ([State BE ([Thing WATER], [Place IN ([Thing TANK]])])]]]

しかしながら、「シカゴに行く」ということは「シカゴにいるようになる」ということを意味することから、GO-TO=INCH-BE-AT であり、従って前者の関数は後者の関数に還元されるとする分析も少なくない。Schank (1973), Dowty (1979) などがそれである。Jackendoff がこのような還元説を否定する理由は、次の三点である。一点目は、関数 GO は、経路関数として TO ばかりでなく、以下に見られるように、その他様々なものを取りうることである：

- (5) The train traveled { to Chicago.
 down the track.
 along the river.
 toward the mountain.
 away from the station.
 etc.

二点目は、多くの GO 動詞は「広がり」(Extension) を表わす (6) のよ

うな用法をもつが、このような用法は状態を表わしており、特定の時間に特定の場所にいるようになるという Event に還元することは出来ないというものである：

- (6) a. The road reaches Kansas City.
 b. The track goes by the mountain.
 c. The fence goes along the river.

従って、このような用法は、(2d) の EXT という関数により (7) のように表示している：

- (7) [State EXT ([RAILROAD], [Path TO ([Kansas City]])]

三点目の理由は、運動は心理学的空間認知において原初的であって、人は運動の終着点について知ることなしに、動いている物を知覚することが可能であるというもの。

この分析に対して、本稿では、以下のような対案を提示したい。まず、(2c) では GO 関数のみが経路関数を項として取るとしているが、関数 GO も BE もどちらも、任意に二番目の項として経路を取りうると提案したい。従って、BE も GO も (8) のように表示される：

- (8) i. [BE([X], $\left\{ \begin{array}{l} [\text{Path}] \\ [\text{Place}] \end{array} \right\})]$
 ii. [GO([X], $\left\{ \begin{array}{l} [\text{Path}] \\ [\text{Place}] \end{array} \right\})]$

すなわち、どちらも二番目の項には場所関数が来るともあれば、経路関数が来るともあるということである。また、さらにこの説に従うならば、GO と INCH との対応関係は、(9) のようになると考えられる。

- (9) i. [GO ([X], [Path])]=[INCH ([BE ([X], [Path])])]
 ii. [GO ([X], [Place])]=[INCH ([BE ([X], [Place])])]

(9) が表わしているのは、GO TO が対応しているのは INCH-BE-AT ではなく、INCH-BE-TO であるということである。この意味において、GO は INCH-BE に還元出来る。

では、以下の節において、(8)、(9)を検証して行くことにする。そして、さらに、Jackendoff がその外に立てている State 関数である ORIENT, EXT 及び Event 関数である STAY との関係についても明らかにして行くことにする。

2.2 BE-Path と GO-Path

関数 BE も (8i) におけるように、経路を二番目の項として取りうることは、以下のような文から、明らかである：

- (10) a. The hills are *toward the north*.
 b. Their house is *to the north of the park*.
 c. He is *away from home*.
 d. The train is *through the tunnel*.
 e. The station is *along the river*.
 f. Their house is *across the bridge*.
 g. His house is *over the hill*.

例えば、(10b) は概念構造では (11) のように表示されることになる：

- (11) [State BE ([Thing THEIR HOUSE], [Path TO ([Place NORTH OF PARK]])])

すなわち、これは (8i) の一部を成す (12) の構造が存在することを意味する：

- (12) [State BE ([X], [Path])]

では次に、(12) のような関数構造が存在したとしても、それが関数 INCH の項となった時、(9i) が示すように、GO-Path と同じであろうか。最も一般的な経路関数として TO を取る場合から、考えてみよう。従来よく (13a) の文は (13b) の文を含意すると言われてきた：

- (13) a. John went to New York.
 b. John was at New York.

しかしながら、この含意関係は、常に成立するわけではない。(14) の文

がそれを裏付けている：

- (14) John went to New York the other day but due to the weather he did not arrive there.

従って、(13) の a、b 間の関係は、「誘いの推論」(invited inference) でのみ捉えることが出来るものである。また、(13a) の文は (13b) の文に直接的に対応しないということは、GOT TO が対応する状態のパターンは、「着点」への指向のみを意味する BE TO、すなわち、GO (X, TO (Y))=INCH (BE (X, TO (Y))) である、といてよいと思われる。では、反対に、BE-AT の対応する状態変化の構造型、INCH-BE-AT が存在するとすれば、どのような動詞なのだろうか。この構造型に当てはまる移動動詞の一つは、arrive のような動詞である。それを示しているのが、(15) の a、b の対立である：

- (15) a. John went *all the way* to New York.

- b. *John arrived *all the way* at New York.

all the way のようなフレーズは、(15a) におけるように「着点」までの移動の経路を修飾することが出来るが、arrive が取る場所関数とは結び付かない。ちなみに、一部の分析には、arrive のような動詞の場合、TO を包入 (incorporation) しているとするものがある。しかしながら、同様に経路を包入していると考えられる動詞 cross, enter などの場合では、*all the way* のフレーズは文末になら取ることが可能である。これに対し、arrive の場合は、文末でも可能ではない¹⁾。次の (16)、(17) と (18) を比較されたい：

- (16) a. John went *all the way* across the continent.

- b. John crossed the continent *all the way*.

- (17) a. John went *all the way* into the cave.

- b. John entered the cave *all the way*.

- (18) *John arrived at New York *all the way*.

all the way 以外にも、経路を取る移動動詞と場所の項のみしか取らない

移動動詞を識別するテストとしては、時点を表わす付加詞との関係が挙げられる。次の (19) の両文に注目したい：

(19) a. John walked to the station *at three*.

b. John arrived at the station *at three*.

(19a) における *at three* は、ジョンが駅へ向けて歩き出した時点を示している、一方、(19b) の *at three* は、ジョンが駅に着いた時点を示している。

では、次に TO 以外の経路関数が BE の項として起こる場合を考えてみよう。この場合 (12) のパターンの存在を示すものである。TO, TOWARD から成る経路表現と他の経路関数で表わされる文、特に、FROM-TO という経路を包入していると考えられる THROUGH, ACROSS, OVER などの経路関数を含む文を比較する時、一つの際立った相違があることが観察できる。それは、前者の経路関数を含む文は、着点に達していない事、すなわち、目標地点である着点に向いている位置にある事を意味するのに対し、後者の経路表現を含む文は着点に達した後の状態（位置）にある事を意味している。例えば、(10b) は、公園の北に位置しているのに対し、(10d) の列車はトンネルを通過した位置にある事、(10g) の家は丘を越えた位置にある事を、意味している。そして、移動動詞 go とこれらの経路関数が結びつく時、ここでも (8i) のような対応関係が妥当なものである事を示唆する。すでに見たように、(13a) の文はジョンが NY に到着した事を必ずしも意味しない。すなわち、GO ([JOHN], [TO (NY)])=INCH ([BE ([JOHN], [TO (NY)])]) である。丁度この逆の関係が、THROUGH, ACROSS, OVER を含む文では成り立っている。以下の文を観察してみよう：

(20) a. The train went through the tunnel.

b. The car went across the bridge.

c. The plane flew over the ocean.

このいずれの文も、その中の経路関数が関数 BE の二番目の項として起こ

った時の状態（例えば、a. ならばトンネルを通り抜けた位置にある事）を、意味している。従って、いずれの場合も (8i) が成り立っていると言える。また、(10)に見られるその外の経路関数 AWAY-FROM, ALONG の場合にも、(8i) の関係が同様に成立している。なぜなら、(21a)、(22a) の文は (21b)、(22b) の文を意味するからである：

- (21) a. He went away from home.
 b. He was away from home.
- (22) a. The car went along the river from 10 to 11 last night.
 b. The car was along the river from 10 to 11 last night.

さて、(8) のような提案をする時、個々の動詞が関数 GO の項として²⁾、Path を取るのか Place を取るのかという問題が当然生じて来る。これに關しては、かなりの議論を要する問題でもあり、ここで充分に取り扱うことはできないが、移動を表わす動詞についてのみ簡単に触れておきたい。移動を表わす動詞の殆どは、(13a) におけるように Path を取ると言える。(それはおそらく、物理的空間上の二点間の移動においては、その間の「経路」は (10) におけるように、さまざまなものが認識されるためであろう。) arrive 以外の Place を取る移動動詞としては、turn が任意的に Place を取ると言える。turn は (23) におけるように、Path も Place も取りうる：

- (23) a. Turn to the left.
 b. Turn here.

また、「設置動詞」である 'put', 'place' などの動詞は、下位事象構造に (24a) のように Place のみを GO の項として取るのが一般的であるが、(24b) のように Path を取る場合もある：

- (24) a. John put the book on the desk.
 b. John put the seeds into the ground.

(24b) の場合の経路関数は (25) のようであると考えられる：

- (25) [Path TO ([Place IN ([Thing GROUND]))]]

2.3 BE-Path と Orient

さて、ここで前節の分析と Jackendoff の用いている Orient との関係について言及しておきたい。彼がこの関数により表示しているのは、以下の 'point' のような動詞である：

- (26) a. The compass pointed north.
 b. [State ORIENT([COMPASS], [Path NORTH])]

(26a) の文は、「コンパスの先が北を向いている」ということを表わしているのもので、これは (11) が表わしている「指向性」と同じであると考えられる。実際、(26a) は概略 (27) のようにパラフレーズ出来る：

- (27) The point of the compass is to the north.

そればかりではなく、実際の移動の無い方向性みの経路は 'far off' というフレーズで修飾できるが、その点でも be to と point は共通している：

- (28) Their house is far off to the north of the park.
 (29) The arrow points far off to the castle.
 (30) I pointed my camera far off at him.³⁾

従って、動詞 point の LCS での表示は、以下のようになると考えられる：

- (31) a. The compass_x points to the north_y.
 b. [State BE ([Thing POINT ([Thing]_x)], [Path TO ([Thing]_y)])]

(31b) は、BE TO の構造型の最初の項の主要部に定項 (constant) の POINT がある構造である。この定項は関数 BE に包入されるので、統語的には x の項が動詞 point の最初の項として具現されることになる。Jackendoff (1983: 168) が、そのほかに ORIENT という関数により表示されるとしている、次のような動詞 *aim*, *face* に関しても、同様の分析が適用可能であろう：

- (32) a. The cannons aim through the tunnel.
 b. My bedroom faces south.

(26a) の文は、State の読みばかりでなく、Event の読みもある。

Jackendoff はこの Event の読みを、[INCH ([ORIENT ([...], [...])])] という形で記述し、INCH という関数を立てる論拠の一つとしている。しかしながら、本稿でも、この読みを、(31b) の構造を関数 INCH の項として埋め込んだ構造、すなわち、INCH-BE-TO の構造型として、記述できる。INCH-BE-TO は、(9) によれば、GO TO と同じである。では、なぜこの読みは空間的移動を意味しないのだろうか。それは、「北に向いた」のはコンパス自身ではなく、コンパスの一部である「先 (POINT)」だからである。ここに、純粹の「状態変化動詞」との接点がある。

以上の事から言えるのは、ORIENT という関数で表わしているものは、TO などの経路関数を項にもつ BE 関数で捉えることが、出来るということである。

2.4 GO-Path と EXT

本節では、Jackendoff の二番目の理由と関係している GO-動詞がもつ空間的「広がり」としての用法の検討を行なう。この議論の前に、(33) におけるような Extension としての GO-動詞と、(34) におけるような Event としての GO-動詞の違いを検討しておきたい。両者の違いはどこから来るのだろうか。

(33) The road (X) reaches *from New York* (at t_1) *to Boston* (Y) (at t_2).

(34) John (X) went *from New York* (at t_1) *to Boston* (Y) (at t_2).

両者とも、起点、着点を伴う経路表現を含んでいる点は共通している。今、主語の NP で表される物（すなわち、移動体）を X、経路を Y とする。(34) の場合には X と Y は別個の存在であるのに対し、(33) の場合には Y は X に含まれている。従って、(34) の場合には、X が起点を発した時点 t_1 は X が着点に着いた時点 t_2 より、常に先立つ。すなわち、 $t_1 > t_2$ である。これに対し、(33) の場合には Y はすでに移動体 X の中に形成されているので、 $t_1 = t_2$ の関係が成り立つ。この起点と着点との間に時間差がない事が、経路表現が状態としての空間的な広がりを生み出す役を果たしている。

従って、以上の二つの要因の違いをまとめると、以下のようになる：

(33') (i) $Y \subset X$ (ii) $t_1 = t_2$

(34') (i) $Y \subsetneq X$ (ii) $t_1 > t_2$

また、(35) のような Event としての Extension の読みは、(35') のようであると考える：

(35) The road finally/soon reached from New York to Boston.

(35') At $t_x \geq t_1$ $Y \subsetneq X$

At $t_2 \geq t_1$ $Y \subset X$

なお、この (35) のような文は、Jackendoff (1990: 92) においては、INCH と EXT という二つの関数により、表示されていたものである：

(36) [Event INCH ([State EXT ([...], [...])])]

なお、(33) - (35) の三つの文が表わしている状況の異同を、以下のよう
に推論規則を使って説明すると、より一層明瞭となろう。まず、典型的な
移動を表している (34) の場合から始める：

(34'') At t_1 JOHN BE AT NY \Rightarrow JOHN NOT BE AT BOSTON

At t_2 JOHN BE AT BOSTON \Rightarrow JOHN NOT BE AT NY

すなわち、 t_1 という時点においては、ジョンがNYを発するためには、NYに居るという事を意味している。この事は、言い換えれば、ジョンがNY以外の所には居ないという事であるから、当然ボストンには居ないという事を意味する。 t_2 という時点では、この逆が成立する。次に、(35) の文の場合は、(35'') のようになる：

(35'') At t_1 ROAD BE AT NY \Rightarrow ROAD NOT BE AT BOSTON

At t_2 ROAD BE AT BOSTON \Rightarrow ROAD BE AT NY

t_1 の時点では、(34'') と同じ推論が成り立つ。異なるのは t_2 の時点である。移動体である道路が着点に達した時点 t_2 においても、起点に位置している。これは、移動体自身の中に経路が形成された事を意味する。最後に、(33) の場合は以下のようなようになる：

(33'') At t_1 ROAD BE AT NY \Rightarrow ROAD BE AT BOSTON

At t_2 ROAD BE AT BOSTON \Rightarrow ROAD BE AT NY

今度は、経路全体が完全に移動体の中にあるので、方向性の相違はあるものの、 t_1 、 t_2 のどちらの時点でも同じ事態を指している。従って $t_1=t_2$ が成立していると言える。

上記から言える事は、Extension とは位置変化という点では移動の一種であるが、移動体自身の中に経路が形成され(てい)る事である。このように考えると、(37) のように起点と着点とが一致している経路をもつ場合も、経路が X に含まれているので、(33) と同様の説明が可能となる：

(37) The moat surrounds / goes around the castle.

そのほか、(38)、(39) のような文も、空間的広がりを時間的空間、抽象的空間という次元に移行すれば、同様の説明を行なえる事になろう⁴⁾：

(38)

The conference $\left\{ \begin{array}{l} \text{went} \\ \text{lasted} \\ \text{extended} \end{array} \right\}$ from Tuesday to Friday.

(Jackendoff 1976: 141)

(39) This theory ranges from the sublime to the ridiculous.

(Ibid.: 139)

以上の議論から、関数 GO が State としての読みをもつのは、移動が特定の条件(すなわち、移動体自身の中に経路が存在する)の下で、 $t_1=t_2$ になる場合である。go, reach に限らず、移動動詞は以下に見られるように、広くこの用法をもつ：

(40) a. The road dropped down into the valley.

b. The mountains rise behind the village.

(B. Levin & M. Rappaport Hovav 1995: 244)

(41) a. One crossed a little valley through which ran the brook called Toby's Run. [L. Broomfield, *The Farm*, 137]

b. On their left, far-distant and hazy, marched a range of impass-

able-looking mountains.

[R. Pilcher, *September*, 193]

c. Before him ascended a gradual swell of smooth stone.

[Z. Grey, *Riders of the Purple Sage*, 51]

d. Behind the house opened a narrow coomb and descended a road to the dwelling.

[E. Phillpotts, *The Red Rednaynes*, 70]

(Ibid.: 245)

(42) The stream flows down into the valley.

(43) The stream glides through the meadow.

移動と「広がり」を GO と EXT という別の関数を用いて単に表記するのではなく、上記のような分析に従うならば、なぜ移動動詞が「広がり」としての読みを持ち得るのかということのを的確に説明出来ることになる。また、Jackendoff の第一の理由への反論と合わせて、関数 GO を INCH-BE に還元できない理由はなくなる⁵⁾。

2.5 STAY と GO 及び BE

この節では、Event を表わす関数として、Jackendoff が立てているもう一つの関数 STAY について検討を行なう。この関数は、(44) に示すように、一番目の項に THING、二番目の項に PLACE を取り、(45) におけるように、remain, stay などの継続を表わす動詞を含む文の表示に用いられる：

(44) [Event STAY ([Thing x], [Place y])]

(45) a. The bird stayed in its nest.

b. Bill remained on the floor.

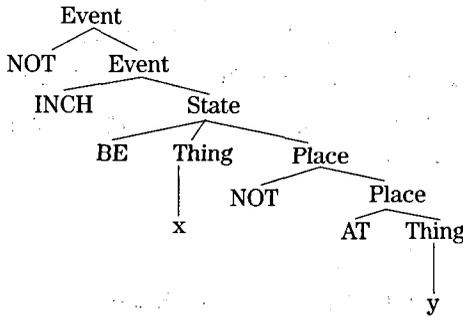
一方、STAY が原初的な関数ではなく、NOT-GO-FROM に分解できるとの分析もある。その場合、Jackendoff の記述法で表わすと、(46) のようになる：

(46) [Event NOT GO ([Thing x], [Path FROM ([Place y]])])

これに関して、Jackendoff (1983: 258) では、前置詞間の対応規則 (correspondence rule) の点で問題がある (すなわち、経路を表わす前置詞 from と場所を表わす前置詞を対応させなければならない) として、この分析を退けている。

しかしながら、問題は FROM にある。ここで Gruber (1976: 55, 68) の 'from' の分析に基づいた解決法を提案したい。Gruber によれば、from は NOT に AT あるいは NOT に TO が結びついたものであるという。この場合、前者を採り入れた次のような LCS での表示に分解できることを、提案したい：

(47)



(47) が表わしているのは、「xがyでない所に居るようにはならない」という事で、この二重否定の構造から、継続的な意味が生まれる。

(47) のような構造を支持するのは、次の二種類の論拠である。

その一つは、意味的含意関係からのものである。stay, remain に関しては、一つは動詞 be と、もう一つは動詞 go との、以下に見るような含意関係が成立している。まず、be 動詞との関係は (48) で観察できる：

(48) John remained / stayed in New York from Tuesday to Friday

⇔ John was in New York from Tuesday to Friday

すなわち、be 動詞とは双方向の含意関係が成り立つ。be 動詞は状態動詞であるのに対し、remain, stay は 'what happened ...' のテストにかかるこ

とからも解るように、Event 動詞である：

- (49) What happened was that John remained / stayed in New York from Tuesday to Friday.

一方が State を表わす動詞であるのに対し、もう一方が Event を表わす動詞であり、なおかつ双方向の含意関係が成立するという事は、何を意味しているのだろうか。すなわち、これは Event 動詞の LCS の方が、(47) におけるような二重否定の構造を成しているに外ならないと、考えられる。次に、動詞 go との含意関係を観察してみよう：

- (50) a. John stayed in New York \Rightarrow John didn't go from New York
b. John went from New York \Rightarrow John didn't stay in New York

ここでは、stay と go from の間には、一方の肯定が他方の否定を意味する関係が成立している。これは、以下のような相補的な反意語に見られる関係と同じである：

- (51) a. The light is on \Rightarrow The light is not off
b. The light is off \Rightarrow The light is not on

このような相補的な反意語同士を意味表示する場合、否定関数 NOT と一方の語が対応する意味要素で行なうことが可能である：

- (52) OFF=NOT ON

これと同様のことが、stay と go from にも、当てはまるといえよう。当然、STAY 関数よりは、GO 関数の方がはるかに一般的であるから、STAY 関数の代わりに NOT-GO-FROM という構造を想定することには、無理はないであろう。以上の二種類の含意関係は、一方が NOT-GO-FROM という構造を、他方が二重否定の構造を示唆するものであるから、最終的には(47) の LCS に行きつくことになる。従って、語彙項目 stay では、BE の下位にある NOT は包入される場合と、隣接する前置詞句の一部として具現する場合の二通りがあることになる。

もう一つの論拠は、remain 及び stay のどちらの動詞も、'away from' というフレーズを取り得るという事から来ている。以下の文に注目された

所を表わす前置詞句をとる場合と、(53)、(54) のような ‘away from’ という経路を表わす前置詞句をとる場合の統一的な説明が可能になる。また、この種の継続動詞と BE 動詞、GO 動詞との関係も明示的に説明できたことになる。

2.6 形容詞補語と経路の有無

これまでの節で扱った状態動詞及び状態変化動詞の表示において、経路関数を取るのかあるいは場所関数のみなのかという事が、重要な役割を演じているのを見てきた。本節では、抽象的な移動と考えられる形容詞を補語にとる状態変化動詞の場合を考察してみたい。果たして、この場合も LCS の表示では、経路関数を取り得るのか、あるいは場所関数のみであろうか。まず以下の四つの動詞の比較から始めよう：

- (56) a. Things went from bad to worse.
 b. Things changed from bad to worse.
 c. Things turned from bad to worse.
 d. *Things became from bad to worse.

上記から明らかのように、*go*, *change*, *turn* のように本来移動を表す動詞は、*from-to* という経路関数を取る事が出来、それに対し *become* のように状態変化のみしか表わし得ない動詞は経路関数を取らないと考えられる。従って、前者は概念構造では (57) であり、一方 ‘Things became bad’ は (58) のようである：

(57) [Event GO ([Thing THINGS], [Path [Path FROM ([Property BAD])] [Path TO ([Property WORSE)])])]]]

(58) [Event GO([Thing THINGS], [Place AT([Property BAD])])]]]

経路を取る形容詞補語と取らない形容詞補語を識別する一つの特徴は、*a little*, *very* のような限定詞との共起関係である。経路を取らない形容詞は限定詞と共起し得るのに対し、取るものは共起しにくい。(59) - (60) の a, b の対比がそれを示している：

- (59) a. John became a little ill.
 b. ??John fell a little ill.
- (60) a. The tire became a little flat.
 b. ??The tire went a little flat.

経路を含む形容詞補語は何故に限定詞を取りにくいのであろうか。これは次のように考える事が出来ると思われる。限定詞を取り得る段階的形容詞 (degree adjective) は尺度を表している。例えば、*bad* という形容詞は、*good-bad* という尺度の一方の端にある事を意味する。これらの形容詞が表す特性が経路関数の中の着点として埋め込まれる時、尺度全体が経路、尺度の一方の端が着点という事になる。限定詞を伴う形容詞は尺度の中間の地点を表しているから、(59) - (60) の b 文では本来着点にならない地点が着点の位置に来ている事を意味する。経路を含む形容詞補語が限定詞を取りにくいのは、このためと考えられる。これに対し、(59a) (60a) の *become* の構造では場所関数が表しているのは必ずしも尺度の到達点である必要はなく、間の地点でも構わないという事である。

興味深いのは、(61)、(62) のような比較級にした場合は、限定詞と共に起し得る事である：

- (61) Things went a little worse.
 (62) The tire went a little flatter.

果たして、これは上記の説明の反例になるのだろうか。答えは NO である。なぜなら、これは「良い状態」から「悪い状態」までの経路ではなく、(57) のような構造が示すような「悪い状態」から「より少し悪い状態」を最終点とする新たに形成された経路だからである。なお、興味深い事には、(59) - (62) に見られる *go* の意味的振る舞いは、段階的形容詞が結果補語として生じた場合に見られる意味的振る舞いと並行している。以下の例と比較されたい：

- (63) ??John hammered the metal a little flat.

(Goldberg 1991: 83)

(64) John hammered the metal a little flatter.

この説を更に裏付けるのは、尺度をもたない二項対立の形容詞は、*become* の補語にはなるが *go* の補語にはならない事である：

(65) a. -The bottle became empty.

b. *The bottle went empty.

(66) a. Dinosaurs became extinct.

b. *Dinosaurs went extinct.

また、*become* のような動詞は経路を取らず、*go* のような動詞は経路を取る事は、前者は名詞句を補語として取るのに対し、後者は取れない事と無関係ではないと思われる：

(67) a. He became a businessman.

b. *He went/came a businessman.

では、(68) の *turn* の場合はどうであろうか：

(68) He turned Christian.

これは、(23) で触れたように、関数 GO の項として、経路関数を取る場合と場所関数を取る場合の両方があるので、場所関数の場合には名詞句を補語とする事も可能であると言えよう。

以上のこの節の考察から言える事は、経路のある状態変化の構造は漸次的変化（あるいは線的变化）と呼ぶべきものを表しうる。これに対し、経路のない状態変化の構造は、段階的变化（あるいは点的変化）を表わしうると言うことである。

2.7 状態及び状態変化の基本的関数構造

この第2節の議論の結果、状態及び移動を含めた状態変化の最も原初的な関数は、BE と INCH のみであるということになる。この二つの関数構造に、場所関数、経路関数が項として、生じる。これらの関数及び否定関数との組み合わせ、あるいは時間軸を考慮に入れると、Jackendoff が立てていた ORIENT, EXT, STAY という関数は、なしで済ませることができ

る。従って、(2) に取って代わる状態及び状態変化に係わる概念構造形成規則は、以下のようになる：

- (69) i.
$$[\text{STATE}] \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} \left[\begin{array}{l} \text{BE} ([\text{THING}], \left\{ \begin{array}{l} [\text{PLACE}] \\ [\text{PATH}] \end{array} \right\}) \\ \text{State} \end{array} \right] \\ \left[\begin{array}{l} \text{State GO} ([\text{THING}], [\text{Path} \{ \text{FROM} ([\text{P}_1) \\ \text{AT } t_1] [\text{TO} ([\text{P}_2)] \text{AT } t_2] \}]]) \\ \text{Condition: } t_1 = t_2 \end{array} \right] \end{array} \right\}$$
- ii.
$$[\text{EVENT}] \rightarrow [\text{Event INCH} ([\text{State BE} ([\text{THING}], \left\{ \begin{array}{l} [\text{PLACE}] \\ [\text{PATH}] \end{array} \right\})])]]]$$

この節の最後に、Jackendoff の第三の理由、運動は心理学的空間認知において原初的である、に対してコメントしておきたい。これに対しては、残念ながら、確たる反論は持ち合わせてはいない。しかしながら、どのような LCS での分析が妥当であるかは、言語学内部の基準、例えばそれがどれだけ説明力があるかといった基準によって決まって来るのであって、心理学的知見といったものがたとえ参考にはなるにしても、それによりア priori に決まるものではない。具体的には、心理学的認知において運動が原初的であるとしても、それは何ら関数 GO が原初的であるということを保証するものではない。

3. 派生的関数 HAVE とその関連構文

3.1 BE と HAVE の関連性

前節においては、LCS での状態動詞及び移動を含めた状態変化動詞の基本的関数構造が、どのような構造を成しているかを、明らかにしてきた。本節では、Pinker (1989) 等において、原初的な関数であるとされている HAVE が関数 BE より語彙規則により派生したものであること、及び HAVE をもつ状態動詞の LCS が項構造、統語構造にどのように投射されるかを、論じる。

まず、この3.1節では、BE と HAVE の関連性についての議論から出発す

る。関数 HAVE が、存在を表わす BE 関数より派生したものであることを示す論拠は、以下の三点である。

まず、存在を表わす文と所有を表わす文は、多くの言語において密接に関連していることが、かなり以前から指摘されている。英語におけるように、所有を表わすのに have 動詞を用いるのは、世界の言語の中では比較的少数である。インド・ヨーロッパ語の中にあっても、スラブ系の言語及びケルト系の言語は全く have 動詞をもっていない。こういった have 動詞をもたない言語にあっては、存在を表わす文がそのまま所有を表わし得る。以下、Anderson (1971) からのフィンランド語、Lyons (1968) からのロシア語、Freeze (1992) からのタガログ語を例として挙げる：

- (70) a. Kirja on Pöydällä.
 book on table
 ‘The table (is) on the table.’
 b. Minulla on kirja.
 me on book
 ‘A book (is) on me = I have a book’

(Anderson 1971: 107)

- (71) a. Na stole kniga.
 on table book
 ‘On the table (is) a book.’
 b. U menja kniga.
 At me book
 ‘At me (is) a book.’

(Lyons 1968: 394-5)

- (72) a. may gera sa ewropa.
 cop[+loc] war in Europe
 ‘There is a war in Europe.’
 b. may relos aṅ naanai.
 cop[+loc] watch ART mom

'Mom has a watch.'

(Freeze 1992: 577)

これらのいずれの言語においても、場所を表わす句の中の名詞句が無生物である場合が a. の存在文であり、有生である場合が b. の所有を表わす文である。上記の例は可分所有の場合であるが、不可分所有の場合でも、have 動詞をもたない言語にあっては、be 動詞で表わされる。以下は、Freeze (1992) からのロシア語、トンガ語、ヒンディー語の例である：

- (73) u menja byla sestra
 at 1sg.GEN was sister.NOM

'I had a sister.'

- (74) 'oku' i ai ae faanau 'a sione
 TNS P 3sg ABS.ART children ABS / GEN John

'John has children.'

- (75) meree doo bhairi hāī
 my.plu two brothers cop.3plu

'My two brothers are=I have two brothers'

二番目に、所有文は存在文を基盤として派生したことを示すのは、ラテン語の have 構文の場合である。Benveniste (1966: 196), Lyons (1968: 392) によれば、(76) の have 構文は (77) の文から発達したものであるという：

- (76) Johannes habet librum.
 John.NOM book.ACC

- (77) Est Johanni liber
 is John.DAT book.NOM

三番目の論拠は、have 構文自体の振る舞いから来ている。よく知られているように、動詞 have は、主語の NP と同一指示の代名詞を前置詞句の目的語として取りうる：

- (78) John, had the book with him.

このような同一指示の代名詞を含む前置詞句は、Theme の存在している場所を表わしているという点で、主語の NP と同じ意味役割を担っている。同一指示の代名詞でない場合でも、前置詞の目的語は主語の指示物の一部を成すものである：

(79) The room has an air-conditioner *on the wall*.

また、この前置詞句内には、主語と同一指示でない名詞句や再帰代名詞は起こり得ない：

(80) a. *John had the book with Mary.

b. *John had the book with himself.

従って、have 動詞の主語の項は、関数 BE の場所の項から移動したものと考えるのが、妥当と思われる。もし、Pinker (1989) のように、HAVE を原初的なものとするならば、なぜ、(78) - (79) の前置詞の目的語が、主語の NP と同一指示の、あるいはその指示物の一部を意味する、名詞句なのかの説明はできない。

3.2 統語規則か語彙規則か

所有の HAVE (または have) が存在の BE (または be) から派生したとしても、ではなぜそれは統語規則ではなく、語彙規則によらなければならないのであろうか。統語規則として動詞 have を be から派生させているものには、Klooster (1972); Freeze (1992) などがある。この二つは、定期的に20年の隔たりがあり、採用している生成文法のモデルも異なるが、統語的操作を用いて、be と have を関係づけている。前者は数量表現を補語にとる cost, weigh などの動詞が、have 動詞の基底であるとする BE WITH から派生したものとしている。後者は、所有文を存在文からの移動変形によって関係づけている。

しかしながら、統語規則による方法は、すくなくとも次の三つの問題点がある。一つは、形態の異なる二つの語彙項目の、一方を他方から派生させる操作は、妥当だとは言えない。そのような規則は、一組の語彙項目同

士の間にもみ成り立つ、極めて一般性の低いものであるからである。もう一つの点は、(78)のように、動詞 *have* が同一指示の代名詞をもつ前置詞句を伴うことに関係している。このような前置詞句は、*have* 動詞のすべての文に起こりうるわけではない。以下の (81) のような位置関係を表わす文には起こりうるが、(82) のように所有関係などその外の関係を表わす文には起こらない：

(81) This box has apples in/on/under/around it.

(Gruber 1965)

(82) a. They used to have a Mercedes Benz (*with them).

b. I have lots of happy memories in Japan (*with me).

このことが意味するのは、たとえ、動詞 *be* から *have* を派生させる統語規則が存在したとしても、それは、*be* が位置関係を表わしているかそれ以外の関係を表わしているかを、参照するものでなければならない。このような意味的条件がついた規則は、統語規則としてではなく語彙規則としてのみ成り立つ。三番目の点は、非常に多くの動詞が *HAVE* を包入した構造をもっていると考えられるからである。英語の状態動詞にまず限って言えば、所有を表わす *possess*, *own*, *lack* はもとより、Foley & Van Valin (1984) が指摘する知識や認識を表わす *know*, *believe* などの動詞、*love*, *like*, *hate* などの感情動詞、*feel*, *smell*, *taste* などの知覚動詞などである⁶⁾。状態変化を表わす動詞では、*get*, *lose* などである。もしこれらの動詞すべてに、*be* から *have* を生成するという統語的操作がかかわっているとすれば、かつて生成意味論がそうであったように、さらに一般性の低い統語規則をふやし、強い派生制約を設けなければならないことになる。また、これらの動詞を *have* と関係づけなかった場合でも、両者の関係を説明できないまま残すことになる。なお、比較的最近、Hale and Keyser (1993) が、以下のような統語構造からの、'head-to-head' 移動による動詞 *shelve* の派生を、提案している：

(83) [VP [v₁ e] NP [VP [v₂ e][pp [p e][NP shelf]]]]

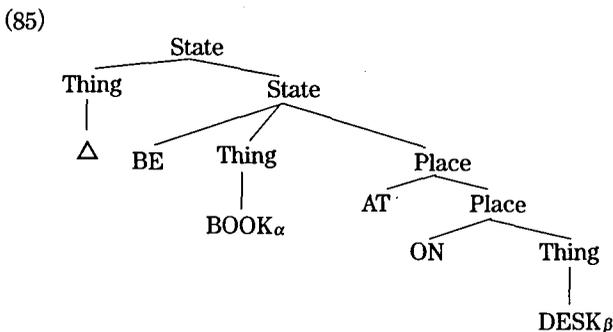
確かに、この移動規則は、統語的に十分動機付けられたものである。しかしながら、この種の分析は、Jackendoff (1997: 231-2) が指摘するように、いくつかの問題点をもっている。例えば、その一つは、なぜ音形が *shelf* ではなく *shelve* なのかの説明がなされていないことである。また、*shelve* という動詞は、Location の項が二つある、明らかに UTAH (主題役付与均一仮説) 違反の 'We shelve the books on the top shelf' のような文を許すが、Hale and Keyser の分析では、この説明ができない。この種の分析を、be から have を統語的に派生させるのに、適用出来たとしても、少なくともこの二つの問題は、同様に生じる。この場合、UTAH 違反の例とは、(78)、(79) のような文である。

3.3 HAVE 形成語彙規則

さて、関数 BE から HAVE を派生させる語彙規則があると仮定する時、それはどのような形態を取りうるものだろうか。以下 (84) のような文を派生させる語彙規則が (86) - (88) のような操作を伴うものであることを提案する。

(84) The desk has a book on it.

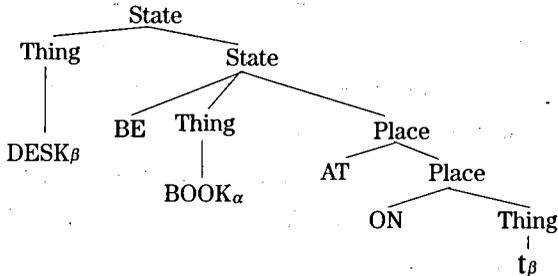
まず元になる概念構造は (85) のようである：



(82) におけるように have が位置関係以外の関係を表わしている場合は、場所関数は [AT ([_{Thing} X])] のようであるとえられる。操作の第一段階は、

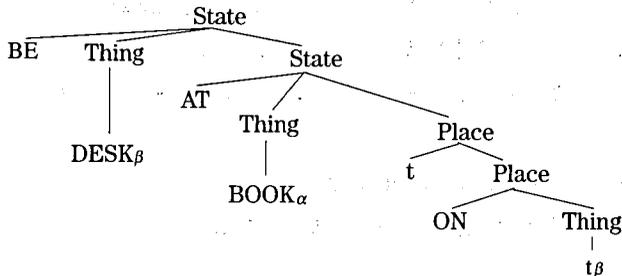
(85) の場所関数の項である [Thing] が定の場合、それを最上位の State 構造中の空白の項に繰り上げる。その際の [Thing] の項には痕跡を残す。この痕跡が最終的な統語の形態として、(84) における *it* になる⁷⁾。

(86)



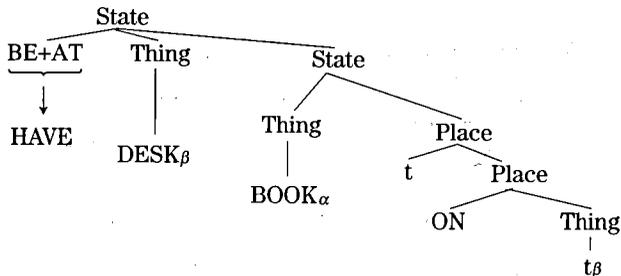
次に、述語 BE を最上位の State 構造に、さらに、空白となった二番目の State 構造の述語には、その下にある場所関数 AT を、順次繰り上げる⁸⁾：

(87)



最後に、述語 BE に AT を包入し、新たな関数 HAVE とする：

(88)



このような一連の操作は、どのように動機付けられるのであろうか。ま

ず、(85) から (86) への操作について考えてみたい。すでに3.1で、多くの言語では、have 動詞によらず be 動詞によって所有概念を表わしていることを述べた。このような言語にあつては、位置を表わす場合と所有を表わす場合とでは、しばしば場所の項と位置されるものの項が逆になっていることが観察されている。すなわち、存在文においては、theme の項が場所の項を c-command しているのに対し、所有を表わす文においては、場所の項が theme を c-command している。⁹⁾ 日本語のアル／イルはもとより、ヒンディー語などもその例である：

- (89) a. 本ガ 机ノ上ニ アル
 b. 彼ニ(ハ) 財産ガ アル
- (90) a. māi hindustaan-mēē thaa
 Theme Location V
 'I was in India.'
- b. larkee-kee paas kattaa hai
 Location(Possessor) Theme V
 'Near the boy is a dog.'

もちろん、Freeze (1992), Harley (1996) 等が主張するように、これらの言語においては、この種の移動は、統語レベルで行なわれているのかもしれない。しかしながら、LCS においても、場所の項の取り立てという同種の移動を想定することには、無理はないと思われる。次に、(86) から (87)、(87) から (88) のステップはどうであろうか。述語 BE, AT が順次繰り上がった結果としての (87) の構造があると仮定することは、be 動詞に二つの異なる構文を認めることを意味する。すなわち主語である NP が Theme である場合と Location である場合である。英語における後者の実現形で所有を表わす場合としては、動詞 have が存在するため頻繁には見られないが、次のような '(be) with' の構文が相当すると思われる：

- (91) a. The City Hall is with a sign (?) on it / at the entrance.
 b. There is a watermelon with no seed in it.

with 節中の前置詞句に現れる NP は、主語の NP (あるいは主部の NP) と同一指示であるかあるいはその一部を成すものしか現れない点で (81) と共通である¹⁰⁾ :

(92) a. *The City Hall is with a sign on another building.

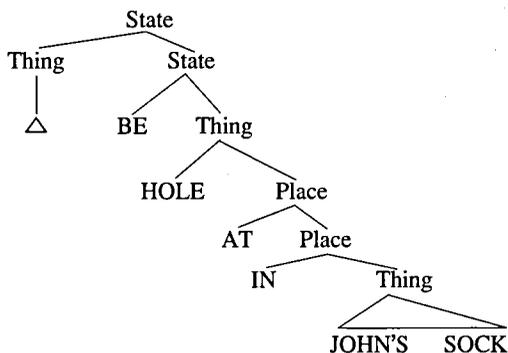
b. *There is a watermelon with no seed in a maskmelon.

また、(87) の構造は、場所の項を目的語にとる provide, equip などの動詞の下位事象構造にも当てはまると、推定される¹¹⁾。(87) から (88) の包入の動機付けはどうかであろうか。これは極めて一般的な操作である。動詞 cross では GO に ACROSS が、enter では GO に INTO が包入されていると考えるのと、何ら変わるところがない。

なお、ここでは不可分所有の have に関する詳しい議論はできないが、'body part' を表わす場合についてのみ、簡単に触れておきたい。(93a) のような文は、(93b) のような LCS をもつと考えられる :

(93) a. John's sock has a hole in it.

b.



(93b) の構造においても、(86) - (88) の操作は同様に適用できると思われる。

3.4 項構造と統語構造への写像

では、ここでは HAVE 形成規則により生み出された (88) の構造は、項構造に連結されるか検討しておきたい。まず存在文の構造型である [BE ([X],[Y])] の場合には、以下のような Levin & Rappaport Hovav (1995) の Existence Linking Rule あるいは影山 (1996) の「内項結びつけ規則」によっても、BE 関数の最初の項である X が直接的内項に結びつくと考えてよいと思われる：

(94) Existence Linking Rule

The argument of a verb whose existence is asserted or denied is its direct internal argument.

(95) 内項結びつけ規則

概念構造における BE の主語が統語構造 (項構造) の内項に対応する。

従って、存在文は非対格自動詞として、(96) のように表わされる

(96) ((x))

さて、関数 HAVE の構造の場合はどうであろうか。すぐに気付くのは、HAVE 関数をもつ状態動詞は、外項を欠く非対格動詞でありながら、対格を標示するということである：

- (97) a. She has *it*⁽²⁾. b. Ich habe *kein Geld*.
c. J' ai *une fille*. d. Johannes habet *librum*.

((=76))

影山 (1991) 及び三宅 (1996) においては、このように外項を欠くにもかかわらず、対格を標示する日本語の次のような事例が挙げられている。

(98) は影山、(99) は三宅からのものである：

- (98) a. 新雪 (x) が山頂 (y) ヲ覆っている
b. 深い堀が城ヲ囲んでいる
(99) a. 涙 (x) が頬ヲ (y) つたつた
b. 汗が額ヲ流れている

このような事例に対して、両氏は外項は欠くが、階層差をもった複数の内項が存在する (100) のような項構造をもつとしている：

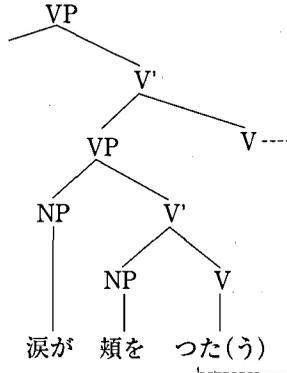
(100) ((x(y)))

さらに、三宅氏は、このような項構造を具現化する統語構造について、次のような提案をしている。すなわち、項構造から統語構造への投射は、一般的に (101) のようになされるとしている。これに対し、(100) の構造の場合は、Larson (1988) で提案されたVの姉妹の位置にさらにVPが投射される (102) のような構造を仮定している：

(101) ①項構造における外項は統語構造においてVPの指定部に投射される。

②項構造における内項は統語構造においてVの補部に投射される。

(102)



(102) におけるような統語構造を立てる理由として、主格名詞句がいわゆる「動作主」を表わすものではないということの他に、(98) のような文を受動化した時、元の主格名詞句を省略できないという事実を挙げている：

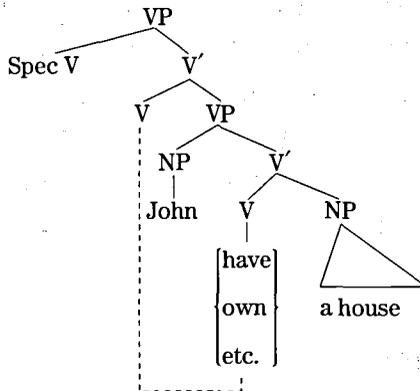
- (98') a. 山頂が新雪に覆われている a'. *山頂が覆われている
 b. 城が深い堀に囲まれている b'. *城が囲まれている

(98) のような動詞の場合、(100) のような項構造をもつので、主格名詞句も内項である。受動化は内項の格上げを行なう。元の名詞句も内項であるので、受動文でも省略できないことになる。

本稿では、この分析を妥当なものとして判断し、HAVE 関数をもつ英語の状態動詞においても、(103a) のような項構造及び (103b) の統語構造を仮定する。

(103) a. ((y(x)))

b.



その根拠としては、この種の動詞に関しても (98') と同様の現象が観察できることである：

(104) a. That large printing firm is owned by Mr. Silver.

b. *That large printing firm is owned.

(105) a. Heroin was possessed by Mr. Campbell.

b. *Heroin was possessed.

(106) a. A razor is contained in a bag.

b. *A razor is contained.

(107) a. Most of the senior positions are held by men.

b. *Most of the senior positions are held.

そしてさらに、これらの動詞に接尾辞 -able が付いた場合も、同様の説明

ができる：

- (108) a. Icecream is containable in a thermos flask.
 b. *Icecream is containable.
- (109) a. A Rolls-Royce is ownable only by the rich.
 b. *A Rolls-Royce is ownable.
- (110) a. Most of the senior positions are holdable only by men.
 b. *Most of the senior positions are holdable.

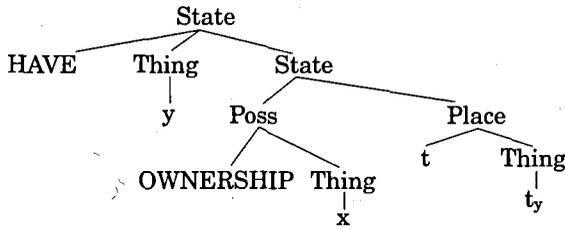
影山 (1996: 156) によれば、接尾辞 *-able* は、外項と内項の両方を備えた動詞に通常適用し、その内項の特性を描写する働きをもつ。従って、そのような外項は省略できる (e.g. He is reliable.)。しかしながら、問題となっている状態動詞の場合には、外項を欠くので、外項に代わる役を果たしている内項も省略できない。そして、この省略できない度合いは、(108) の *contain* のように「失業者」となった項が *by* 以外の前置詞で表わされる場合ほど高くなる。

3.5 動詞 *have* と関連動詞

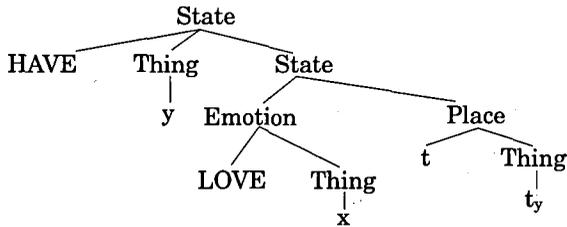
3.4節においては、関数 *HAVE* をもつ動詞 *have* 及び他の状態動詞の LCS から項構造及び統語構造への写像を議論してきた。いずれの動詞も、非対格動詞でありながら、対格を標示するという点では共通であった。しかしながら、動詞 *have* と他の状態動詞、すなわち、所有を表わす *possess* や *own*、心理的状态を表わす *love*, *hate*, *fear* などでは、いくつかの統語的振る舞いにおいて、違いがあることに気付く。本節では、そういった違いがどこから来るのか、探ることにする。

まず、一つの違いは、受動化に関するものである。(104) - (107) で挙げた状態動詞及び心理的状态を表わす動詞 *love*, *hate* などは、受動化されるのに対して、何故 *have* は受動化されないのであろうか。その一つの要因は、LCS において包入が行なわれているか否かである。*own* と *love* の、「*HAVE* 形成規則」が適用された後の LCS での表示を見てみよう：

(111)



(112)



すなわち、(111)、(112) が表わしているのは、概略、'y has the ownership of x', 'y has love for x' ということである。そして、定項である OWNERSHIP, LOVE がそれぞれ HAVE に包入されて、動詞 own, love が形成される。従って、'y has x' と 'y owns x', 'y loves x' との違いは、前者の x は Theme それ自体であるのに対し、後者の x は Theme を構成する関数の項である。さて、受動化の問題に話を進めよう。受動化は、言うまでもなく、統語部門でなされる移動操作である。しかしながら、以下の二つの点で、語彙概念部門でなされる「HAVE 形成規則」と共通の特性をもっている：

- (113) ①本来非主格を付与されるはずの項の、主格の項の位置への昇格
- ②本来主格を付与されるはずの項の、非主格の項あるいは付加詞の位置への降格

動詞 have が仮に受動化されたとした場合、まず、「HAVE 形成規則」により、y の項に①の昇格の操作を適用し、x の項に②の(相対的な)降格の操作が適用されている。そして、受動化により、今度は y の項に②の降格の操作を適用し、x の項に①の昇格の操作を適用している。「HAVE 形成規則」も受動化も共に、'背景' 的な項に「際立ち」を与えることを、そ

の役割としているが、二つの部門の操作で相反することを行なうことになる。それ故に、動詞 have を含む文は存在しないと考える。一方、own や love を含む受動文が成立するのは、y の項に適用される操作に関しては、have の場合と共通であるが、x の項に関しては異なっているからである。x の項が受動化により、「際立ち」を与えられることは何ら問題のない操作である。従って、have に対して、own や love のような動詞が受動態になるのは、LCS において HAVE に包入される定項をもっていることに起因している。この説を裏付けるのは、lack という動詞である。この動詞は、LCS では HAVE 関数をもっているが、定項はもっていない。‘y lacks x’ の表示は以下のものである：

(114) [State NOT ([State HAVE ([y], [x])])]

従って、lack を含む文は対応する受動文をもたない：

(115) a. Alex lacks confidence.

b. *Confidence is lacked by Alex.

では次に、これらの状態動詞の照応現象について少し触れておきたい。これらの動詞の中で、再帰形、each other などの照応形と最も適合するのは、心理動詞である：

(116) a. *John has himself.

b. *They have each other.

(117) a. *John owns himself.

b. *They own each other.

(118) a. Mary loves herself.

b. They love each other.

その理由としては、まず動詞 have の場合には、関数 HAVE の元になっている構造型 [BE ([X], [AT ([Y])])] の項に課される制約から来ている。すなわち、その制約とは、Theme の項 X は場所関数の項 Y と同一であってはならないというものである。あるいは、X が複数の指示物をもつ集合であっても、その部分集合の補集合が Y であってはならないというものである。

(これは、*‘They are at themselves.’とか*‘They are at each other.’といった文が成り立たないことにも当てはまるものである。) own の場合は、(111) の樹形図から明らかなように、x の項に来るのは常に‘人間’であるから、OWNERSHIP の項となるのは、所有する「価値のある物」ということになり、(117) の両文は成り立たない。love の場合は、(112) から明らかなように、y と同一の指示物が LOVE の項であっても、何ら差し支えはない。また、語彙概念構造と統語構造の両方に亘る、この種の心理動詞が絡む照応束縛関係の説明は、本稿の域を越えるものであり、別の所に譲らざるを得ない。しかしながら、(112) のような HAVE 関数を含む表示に関係した点についてのみ、言及しておくことにする。Suzuki (1995) においては、これらの動詞の意味表示を、Pinker と同様に原初的とする関数 HAVE を用いて、行なっている：

(119) a. Mary likes stories about herself.

b. [HAVE ([MARY], [PLEASURE ([STORIES ABOUT HERSELF])])]

HAVE 関数が BE 関数から派生したものではなく、原初的であるとするのは、先行詞と照応形との間に成り立つ *s (semantic)-command* の関係が説明できることを、理由としている。しかしながら、意味表示のレベルで、項を先行詞と照応形に区別しておく必要はない。このレベルでは、同じ指標をもつ変項のまま、統語構造に写像する際、*c-command* される位置に写像される項に照応形を与えれば、済むことと思われる。勿論、この方法に関しても、更なる十分な検討を要することは、言うまでもない。

4. 結 び

以上、本稿では、主として次の二点をめぐって議論を行ってきた：
 (i) 状態及び状態変化動詞の語彙概念構造表示を構成する基本的な関数構造はどのようなものであるか；(ii) 関数 BE から関数 HAVE を派生させる語彙規則の存在と、そのような派生的な関数をもつ LCS がどのような項構造、統語構造に投射されるか。(i) に関わる分析の要点は、次の

ようなものである：

- 1) 状態及び移動を含めた状態変化の最も原初的な関数は、BE と INCH のみである。
- 2) 経路は、関数 GO も BE もどちらも、任意に二番目の項として取りうるので、GO を INCH-BE に還元することができる。また、移動動詞における経路の有無の対立は、抽象的な状態変化を表わす文にも当てはまるものである。
- 3) 関数 BE と INCH 及び否定関数との組み合わせ、あるいは時間軸を考慮に入れると、Jackendoff が立てていた ORIENT, EXT, STAY という関数は、なしで済ませることができる。

(ii) に関わる分析の要点は、以下の通りである：

- 1) HAVE を形成する語彙規則は、関数 BE より、場所の項の移動、AT の BE への包入などの操作を含み、包入以前の段階の構造も、所有を表わす '(be) with' の LCS、あるいは 'with' を伴う provide などの動詞の LCS の一部を、構成する。
- 2) HAVE をもつ LCS を具現化する項構造は、外項は欠くが、階層差のある複数の内項をもつものである。また、このような項構造が写像される統語構造は、Larson (1988) が提案した、V の姉妹の位置に VP が投射される構造である。
- 3) 動詞 have と他の HAVE 関数をもつ状態動詞との間に見られる、受動化や照応現象に関する相違は、後者が LCS で定項を HAVE に包入していることに、帰せられる。

(i) に関わる分析を通しては、単に原初的関数の数を少なくすることが出来ただけでなく、これにより、状態と移動の接点、移動と状態変化の接点などをより明示的な形で、説明し得た。今後はさらに多くの関連動詞の分析や他の言語のこの種の動詞の分析を通して、本稿での主張を検証して行く必要がある。(ii) の語彙規則としての「HAVE 形成規則」は、もっている射程は極めて大きいと言える。その射程の範囲は、3 節で取り上

げた状態動詞ばかりでなく、さまざまな have-構文、-ed 形容詞、二重目的語構文、場所格交替動詞などに及んでいる。しかしながら、関係するところが多岐にわたるとともに、残された課題もまた多い。とりわけ、関数 HAVE をもつと推定される動詞のさまざまな統語的問題との関連で、この規則の妥当性を検証していくことが残されている。また、語彙規則そのものに関しては、Levin and Rappaport (1995: 214) も指摘するように、可能な語彙規則とはどのようなものかを、規定または制限する原理や制約の検討が必要である。

注

*本稿をまとめるにあたって、Peter Goldsbury 氏、Carol Rinnert 氏、Janet Higgins 氏にはデータのチェック等に忍耐強くご協力いただいた。また、査読にあたった二人の評者の方には適切なコメントを頂戴した。これらの方々に、感謝の意を表する次第です。

1) *arrive* の場合は経路関数をもたないという事は、次の2.3節で議論する *Extension* の用法との関係でも示される。経路関数をもつ移動動詞は状態としての *Extension* の用法をもちうるが、場所関数のみの移動動詞はその用法をもちえない。*reach* の場合には前者に相当するが、*arrive* は後者に相当する：

(i) This road reaches / *arrives at New York.

2) 本稿では、すでに述べたように、関数 GO は INCH-BE に分解できるという立場を取っているが、記述の煩雑さを避けるため、便宜上 GO という関数も説明に使用する。

3) *point* などの動詞が取る *at* と *to* の違いは、前者が目標となる所が点であるのに対し、後者は方向のみであるということである。以下の文がそれを表わしている：

(i) The magnetic needle points to / *at the north.

(ii) The magnetic needle points *to / at the star.

- 4) また、Extension の場合移動体が決して起点を離れる事がないという特徴に、典型的な状態変化動詞との接点があると思われる。lie, hang, spread のような動詞の場合を考えてみたい。これらの動詞は典型的な移動は表わしえないが、経路関数をとる Extension なら表わしうる：

- (i) a. An icicle hung from the roof.
 b. Snow lay from Aomori to Hokkaido.
 c. Cholera spread through the refugee camp at an alarming rate.

しかし、これらの動詞は起点（すなわち、空間における特定の位置）を決して離れる事はないという特徴から、容易に場所関数をとる状態変化及び状態の用法に移行しうる：

- (ii) a. Her coat hangs on the hook.
 b. The town lies in a small wooded valley.
 c. The ink spread on the desk.

- 5) (33) に代表される移動動詞の「広がり」としての用法は、認知言語学 (Langacker (1987), Talmy (1996) 等) においては、「主観的移動」または「視点の移動」として説明されているものである。本分析との違いについて若干考えを述べておきたい。

まず、この種の文に関して、「視点」がかかわっていることは、確かである。しかしながら、「視点」とは、この種の文を発話として発する「話者の視点」ということである。従って、「視点の移動」という解釈は、この種の文の語用論的側面を捉えていることになる。しかしながら、この捉え方では、本分析が明らかにしたような、意味論的な側面の問題には、説明を提供出来ていないと思われる。その種の問題とは、以下のようなものである：(i) 通常の移動は Event であるのに対し、(33) のような文では State になるのはなぜか；(ii) (33) の文に対して Event を表わしている (35) の文との関係はどのように説明できるのか（またこの問いと関連して、(35) の文も (33) の文と同様、「視点の移動」はあるのだろうか。あるとするならば、(34) の Event の場合には、「視点の移

動」はなぜないのか。)

もちろん、本稿のような分析の場合も、対応する語用論における「視点」の分析と、どのように関連付けて行くかという問題が残されている。

- 6) この種の状態動詞に関して特に興味深いのは、Noonan (1993) の次のような指摘である。状態を表わす他動詞をもたないアイルランド語では、心理的状态を意味する述語は、locatives (所格) の形で表わされる：

(i) Tá gaeilge ag Flíodhais.
is Irish at Flíodhais
'Flíodhais knows Irish.'

(ii) Tá eagla roimh an bpuica ag Ailill.
is fear before the Puca at Ailill
'Ailill fears the Puca.'

(iii) Tá meas ar Meadhbh ag Ailill.
is respect on Meadhbh at Ailill
'Ailill respects Meadhbh.'

これは、状態他動詞で表現される英語、ドイツ語、フランス語などと、対立するものである：

- (iv) a. John loves / hates / fears Mary.
b. Hans liebt / haßt / fürchtet Maria.
c. Jean aime / déteste / craint Marie.

また、アイルランド語では、所有を表わす動詞ももたない：

(v) Tá teach ag Flíodhais
is house at F.
'Flíodhais has a house.'

Noonan は、これらのアイルランド語の特性は、語彙項目として HAVE が欠如していることに起因しているとしている。

- 7) なお、場所関数が AT のみの時は、この部分の関数構造は形態的に実

現形をもたない。それは、空間における特定の位置を指定する必要のない、(82)におけるような、所有関係などを表わす場合である。

- 8) (85) から (86) への移動と同様、ここでのそれぞれの移動の操作は、所謂 'move *a*' として捉えられると思われる。
- 9) このことは、Freeze (1992), Harley (1996) などの指摘に拠っている。
- 10) 否定関数 NOT を含んでいると考えられる 'without' に関しても、同様のことが言える：

- (i) a. There is a watermelon without any seed in it.
 b. ?That watermelon is without any seed in it.

- 11) この点に関して、注目したいのは、以下のような文である：

- (i) They provided the car with a radio *in it*.
 (ii) They equipped the room with a heating apparatus *on the wall*.

なお、(87) のような構造の妥当性はともかく、(87) のような構造があるとする事及び (87) がこの種の動詞と関係している事は、直接的には (91) のような文や上記のような文に気付いたことに因るが、間接的には約半年前に目を通した Kageyama (1997) の影響があると思われるので、記しておきたい。

また、前節で言及した、Hale and Keyser (1993) の動詞 *shelve* の分析の反例となる文、'We shelved the books on the top shelf' も(ii)と同種のものとして処理できると考えられる。但し、*shelve* の場合は LCS での包入も行なわれている点が異なる。

- 12) もちろん、英語の場合は対格と与格との区別はない。

REFERENCES

- Anderson, John 1971 *The grammar of case*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Benveniste, Émile 1966 *Problèmes de linguistique générale*. Paris: Gallimard.

- Dowty, David R. 1979 *Word meaning and Montague Grammar*. Dordrecht: Reidel.
- Foley, William and Robert Van Valin, Jr. 1984 *Functional syntax and universal grammar*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Freeze, Ray 1992 Existentials and other locatives. *Language* 68: 553–95.
- Goldberg, Adele E. 1991 A semantic account of resultatives. *Linguistic Analysis* 21: 66–96.
- Gruber, Jeffrey 1965 *Studies in lexical relations*. Doctoral dissertation, MIT.
- _____ 1976 *Lexical structures in syntax and semantics*. Amsterdam: North-Holland.
- Hale, Ken and Samuel J. Keyser 1993 On argument structure and the lexical expression of syntactic relations. In: Ken Hale and Samuel J. Keyser (eds.) *The view from building 20*: 53–109. Cambridge, MA: MIT Press.
- Harley, Heidi 1996 If you *have*, you can *give*. *WCCFL* 15: 193–207.
- Iatridou, Sabine 1995 To Have and Have not: on the deconstruction approach. *WCCFL* 14: 185–201.
- 井上和子 1998a 「経路のある変化とない変化－概念構造における状態変化の表示について－」 *JELS* 15: 51–60.
- _____ 1998b 「可分所有の *Have* と二重目的語構文」(草稿)
- Jackendoff, Ray S. 1976 Toward an explanatory semantic representation. *Linguistic Inquiry* 7: 89–150.
- _____ 1983 *Semantics and cognition*. Cambridge, MA: MIT Press.
- _____ 1990 *Semantic structures*. Cambridge, MA: MIT Press.
- _____ 1997 *The architecture of the language faculty*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 影山太郎 1991 「統語構造と語彙構造のヴォイス変換」『言語理論と日本語教育の相互活性化 (予稿集)』: 49–58. 津田日本語教育センター

- _____ 1996 『動詞意味論』 くろしお出版
- 影山太郎・由本陽子 1997 日英語比較選書(中右実編)⑧『語形成と概念構造』研究社出版
- Kageyama, Taro 1997 Denominal verbs and relative salience in Lexical Conceptual Structure. In: Taro Kageyama (ed.) *Verb semantics and syntactic structure*: 45–96. Tokyo: Kurosio Publisher.
- Klooster, W.G. 1972 *The structure underlying measure phrase sentences*. Dordrecht-Holland: Reidel.
- Langacker, Ronald W. 1987 *Foundations of cognitive grammar*. vol. 1: Theoretical prerequisites. Stanford: Stanford University Press.
- Larson, Richard K. 1988 On the double object construction. *Linguistic Inquiry* 19: 335–91.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav 1995 *Unaccusativity: at the syntax-lexical semantics interface*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Lyons, John 1968 *Introduction to theoretical linguistics*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- 松本 曜 1997 「英語前置詞による「到達経路表現」, - 認知言語学的視点から」『英語青年』3: 661–663.
- 三宅知宏 1996 「日本語の移動動詞の対格表示について」『言語研究』110: 143–168.
- 中右 実 1992 「経験のHAVE」『現代英語学の歩み: 安井稔博士古希記念論文集』: 333–342. 開拓社
- Noonan, Máire 1993 Statives, perfectives and accusativity: the importance of being HAVE. *WCCFL* 12: 354–370.
- Pinker, Steven 1989 *Learnability and cognition*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Rappaport, Malka and Beth Levin 1988 What to do with Θ roles. In: Wendy Wilkins (ed.) *Syntax and semantics 21: Thematic relations*: 7–36.

New York: Academic Press.

- Schank, Roger C. 1973 Identification of conceptualizations underlying natural language. In: R. Schank and K. Colby (eds.) *Computer models of thought and language*: 187–248. San Francisco: W.H. Freeman.
- Suzuki, Takeru 1993 A lexical-semantic approach to psychological verbs and anaphoric binding. In: H. Nakajima and Y. Otsu (eds.) *Argument structure: its syntax and acquisition*: 47–68. Tokyo: Kaitakusha.
- Talmy, Leonard 1996 Fictive motion in language and “ception”. In: P. Bloom *et al.* (eds.) *Language and space*: 211–276. Cambridge, MA: MIT Press.
- 田中茂範・松本 曜 1997 日英語比較選書（中右実編）⑥『空間と移動の表現』研究社出版

The Semantics of State and Change of State Verbs

Kazuko INOUE

The purpose of this paper is twofold. One is to give the basic function-argument organization for the semantic representation of the state and change of state verbs. The other is to propose a lexical rule called "HAVE-Production Rule," which derives the function HAVE from the primitive BE and to discuss how LCS (Lexical Conceptual Structures) with HAVE correspond to syntactic structures.

For the first purpose it is argued that since the Path-function occurs as the second argument of either BE- or GO-function, the GO-function can be reduced to INCH-BE. It is also pointed out that the other STATE and EVENT functions, ORIENT, EXT and STAY, which Jackendoff (1990) posits as primitives, can be dispensed with; the first one is analyzed as a variant of BE-Path and the second one as a variant of the GO-function under the condition that the moving entity is itself a Path; and the third one is decomposed into 'NOT-INCH-BE-NOT-AT.' Thus it is concluded that there are no more than two primitive functions for the verbs in question, that is, BE and INCH.

For the second purpose it is argued that the function HAVE is by no means primitive and that there must be a lexical rule which converts the positional BE with a Place argument into the possessional HAVE. Arguments are also given for the intermediate stages in the operation of the rule, and for the mapping of the output LCS to its argument structure and D-structure.